

俳人成田千空研究会

千空研究

第14号

夏山の風を貰ひてにぎり飯

—千空句版画—

藤田 健次

千空さんの句には山菜がよく登場する。タケノコ、ワラビ、タラの芽、フキなどなど。千空さんは、その季節になると、山菜採りによく出かけていたようだ。この作品も、そうした山へ出かけた時の一句。仲間と一緒にの昼食の時間である。明るい広場へ出て腰を下ろす。山は晴れ、さわやかな初夏の風が通り過ぎる。にぎり飯のうまいこと。袋の中は香り豊かな山菜がずっしり。帰ってからの、山の幸尽くしの晩酌が楽しみだ。第5句集『忘年』より。

(版画家・会員／八戸市)



目次

夏山の風を貰ひてにぎり飯
—千空句版画—

藤田 健次

1

〈回想の成田千空〉

縁は不思議である

鳴海 顔回

2

千空先生に俳句を習う①

俳句は一人称の文学

世良 啓

3

寺山修司と成田千空

齋藤 美穂

4

〈千空点描〉千空という俳号

齋藤 美穂

5

〈作品鑑賞を読む〉⑫

禿頭と白頭われら露明り

大串 章

7

〈小特集 兜太と千空〉

前衛俳句の兜太と伝統の千空

齋藤 美穂

7

金子兜太と成田千空

齋藤 美穂

9

〈成田千空資料再録〉⑬

戦後作家展望(二) 金子兜太

齋藤 美穂

11

〈成田千空資料〉

兜太俳句についての感想

佐渡旅行記・佐渡へ20句

12

佐渡旅行記・佐渡へ20句

佐渡旅行記・佐渡へ20句

13

会員名簿・北極星

佐渡旅行記・佐渡へ20句

16

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

回想の成田千空

縁は不思議である

鳴海 顔 回

千空さんとお会いしたのは、たった一度きり。2005年の一月から一年間、県内の俳人と共に「俳句で行くあもり」という陸奥新報社の連載企画の最終項に、千空さんに登場してもらった時である。

私といえば、俳句を齧りはじめた初学のころで、不遜といえど不遜な出会いだったかも知れない。千空さん八十四歳、私は五十八歳だった。しかしそんな年齢差は微塵も感じさせず、優しく迎えてくれた。

生来、私はよげ喋りなのだが、千空さんも軽く付き合ってくれた。私の煙草臭い古い車に二人で乗って、五所川原の師弟句碑から金木の斜陽館に向かって行った。

少し雨が降っていた。

この文面は、十一月三十日付けの本紙掲載のものである。

——千空さんは太宰と草田男が好きだった。疎開中の太宰を金木に訪ねている。『家の前まで行って帰ってきた。オジョンド（怖気づいた）だべな。それで会わずじまいだった』。——その時現地で作った句が

行く秋やそぼ降る雨の斜陽館

千空

「千空研究」第十二号には、千空さんが読売新

聞に書いたコラム「私空間」の再録に私に話してくれた同じ状況が書かれていた。

——一度、太宰さんに会う決心をして、金木の津島家の門前まで行ったが、余りにも豪壮な家に入りかねた。「このブルジョアめ」とばかり、赤い煉瓦塀をたたいて帰った。——

千空さんは本当に太宰治が好きだったんだなあ。このコラムは1998年に書かれ、私が聞いたのは、その六年後である。経年の変化ではない。赤い煉瓦塀をたたいた千空さんも、オジョンドだべなと思う千空さんの二つの思いには、なんの離反もない。

行く秋やそぼ降る雨の斜陽館——の句に、初学の私にはよく句意が掴めずにいたが、——「どうか死なないで、よい小説を書いて下さい」と、「如是我聞」を読んで、太宰の自殺を予感したのであった。——と続くコラムには、「太宰死ぬな」という千空さんの悲痛な叫びが聞こえてくる。

そのはがきは、生きている太宰の許には届かなかった。

「そぼ降る雨……」には、千空さんの身内に残る太宰や帰郷して母の実家で帰農していた若い時代の自分が、塗り込まれていたのか——と改めて思わされた。

その時の取材には、私たちの車を追って、市子夫人と鳴瀬牛角さん、櫛引麗子さんの三人が同道していた。旧市浦村の十三湖岸にあるレストラン「和歌山」で昼となったが、みんなでシジミラーメンを頼んだ。頼んだのはいいが座るなり、句会をやるうという話になっている。

五題の出句。なんで俳人という人種はこうも句会をやりたがるものなのだろう。必死で五句をひ

ねり出した。「先生、五句出来ました」と言った。私が一番投句が遅いのだろう——との思いで申告したつもりだったのが、千空さんは「顔回さん、五句ったら十句、二十句作ってのごとでせ」と、そのまま句帳を睨んでいる。

「先生、ラーメンが延びてしまいますよ」

「句が出来だあど、延びだソバをアデに酒コ飲むのが旨いんだよ」

車の運転でその日、酒を飲むことは出来なかったが確かにソバは延びていた。

記憶は不確かだが私の句は「秋陽当たる日のモヤ山は神の山」だったと思う。千空さんはこの句を○点で取ってくれた。考えて見れば、他の三人の句柄は周知のことだから、あえて私の句を取ったのは千空さんのサービス精神だったのだろう。帰りの車の中で千空さんと私の会話は続いている。

「顔回さんって、青森でも弘前でもねえし、黒石ってしても黒石の人でもねえな」

千空さんには、俳人、文化人が持つある地域特有の匂いが分かるらしい。

私はこの時、論説室長として社説を書いていたし、社歴の三分の二ほどは記者として過ごしていた。まして文化部に在職していたこともなかったのだから、文化人臭はまったくなかったと思う。千空さんの臭覚は的を得たものだった。

「私、先生の句で大好きなのが——われら蝦夷蛭貝殻鳴らし喰ふ、と、も一つ、なんぞ忘年……」と言ったら千空さんも声を揃えて「……己が外套扉に挟む、か」と二人で大笑いした。

五所川原に向かって、旧木造町の河川道を走っていた時、唐突に「私は土の人だなあ」と言った。

土の人とはどんな……。私は何とも言わずにただ黙っていた。「兜太も土だな」。

あの金子兜太さんである。「空・風・火・水・地」の土なのだろうか。それは当然若い時からの志向ではない。長い年月を経て実感した今の自分なのだろうかと思う。

『永遠に生きるかのように学べ、明日死ぬかのように生きろ』とマハトマ・ガンジーは言っている。こんな言葉を聞くと私なんかは気が滅入るが、千空さんは永遠に生きるかのように、学んでる人だったのだ。

(なるみ がんかい／本名 静孝／此岸俳句会／黒石市)

千空先生に俳句を習う①

俳句は一人称の文学

世 良 啓

私が俳句を始めた日時ははっきりしている。2002年10月1日、13時30分から15時30分まで。場所はNHK弘前文化センター、NHK俳句入門という講座で、師は成田千空。私はこの日から12月まで、3ヶ月全6回だけこの教室に通った。なぜそんなにはつきり言えるかといえばノートに毎回の句会の記録をつけていたからで、なぜ記録などつけていたかといえば、のちに授業で使おうと思っていたからである。

当時私は弘前中央高校の教師で、12月まで育児休業中だった。

弘中央では俳句は全生徒につくらせ、高文連の

大会などに盛んに応募していた。私は俳句に関してそれまで授業で教わったことも、まともに作ったこともなく、トンチンカンの門外漢だった。それで生徒のつくる俳句のどれがよいのかさっぱりわからない。途方に暮れた。これはまずい。才能ある生徒を見落とすかもしれない。育児休業が明ける頃にはせめて良い句を選べるようにになりたい。それが俳句を学ぶ動機だった。

だが素人のくせに師は選ばなくてはならぬ、とも思っていた。生意気である。弓道の教本に「初心のものは師をよく選ぶべし」とある。最初の師の影響は人生全般にわたる、初心だからこそ師は一流をえらんで教えを乞え、というわけだ。

「俳人 成田千空」の名は五所川原高校に勤務していた時知った。地区の図書館部会の生徒対象の講演があり、図書の先生方は皆浮き足立っていた。「蛇笏賞知らないの？ 俳句の芥川賞みたいなものだよ。すごい人なんだよ」と責められて、よほど偉い方なのだろうと思った。だがご本人はいたって気さくで、寺山修司や太宰治のお話もされ、講演のあと乞われるまま、笑顔で色紙に自作句を次々書かれていた。

その千空さんが弘前にきて俳句教室をやっているとは思わなかった。チャンス。俳句を教わるならこの人しかない、という直感のまますぐに出かけた。

とにかく俳句が知りたい。育児休業はもうすぐ終わってしまう。現場に戻れば激務、ゆっくり俳句を学んでいる時間などない。

「千空さんの教室は満員で、皆さんベテランで初心者の方はどうでしょうね……」と受付のお姉さんは心配して千空さんにお伺いをたてに行っ

てくれた。千空さんは一階のテールにたくさん紙を広げ、忙しそうに超高速で選句をしていた。

3ヶ月だけ見学させてほしいと正直に伝えると「いいですよ」あっけないほど簡単に許可された。「じゃ、月って季語で1句つくって。ほんととは3句だけど1句でも2句でもいい」かなりの早口津軽弁だった。慌てて無理です、と断わったが、出すのが当然という顔をされている。

千空さんにとって実作がすべてなのだった。

というわけで16年前、私が初めて体験した俳句入門、千空体験をこれから数回に分けて紙上中継してみようと思う。

懐かしい俳句ノートを広げると、まずこの日、最初には句会の〈手順〉が書かれてある。

- 1、紙配布。↑事前に葉書
- 2、先生が声に出してよむ。
- 3、良い句を7句選び、特選に○印。(各自)
- 4、一人ずつ選んだものを発表。
- 5、一番から評をする。(選んだ人が)
- 6、誰の句か明かす。
- 7、次回予告

書いた私がこの時にかにド素人だったかがわかる。

最初に配布される紙とは、皆から集めた句を千空さんが鉛筆でB4用紙に書いたのをコピーしたもの。当日の参加者は18人。

私が一番驚いたのは千空さん自らつくって一緒に投句していたことだ。俳句の主宰とは、学校の教師のように弟子に一方的に教える存在ではないらしい。それに、句はひとりでするものなのだが、つくったあとの合評の時間が楽しく、これこそ俳句の醍醐味なのということも知った。座の

文学とはこういうことかと一人合点した。

全員が選句評し終わると、最後に千空さんが1句1句を鑑賞、批評していく。時折、黒板にカツカツと字を刻みながら「俳句とは何か」を語った。熱い口調で、内容はかみくだくように。あれは初心者の私へのサービスだったようにも思うし、改めてご自分に言い聞かせるようでもあった。背の高いがっちりした肉体から飛び出す言葉には五所川原の濃い訛り。しかも早い。こちらの腹に胸に響いてくる。祖父母の使う懐かしい津軽のことばだが、内容はインテリジェンス。だが教える、という押しつけがましきはない。まるで求道者のようだった。

第1回で教わったことを私がまとめたメモは次の5点だ。

○俳句は一人称の文学である：解釈に迷ったら、主語は「私」

○背後に社会風刺等も読める。

○感動の主体はあるか。詩情はあるか。余情はあるか。

○正岡子規は客観主義で俳句のルネサンスをしなげに、やがて句が主観へと変化していった。興味深いことだ。

○短歌、俳句の目的のひとつに「美しい言葉を捉えること」がある。

さてこの日私が急いで作って先生に渡したのが次の2句。

子の寝息ひっそり漕ぎ出す月の海

もう一度母になろうか青月夜

苦し紛れの俳句をこの日千空さんはよくほめてくださった。

子の寝息の句は短歌的叙情があり、青月夜の句

は「なろうか、がよい。素朴でよい。月の青さもいい」と千空さんから1点いただいた。うれしかった。忘れない1点。

「あんたはうまくなるよ。筋がいい」と言っていただき、ぼうつとなった。もちろんうれしかったが、最初なので若い私へのサービスだろうと少し斜めに受け取った。だが俳句はそんな甘っちょろいものではない、と次回思い知ることになる。

(続く)

(文筆家・高校教師／藤崎町)

寺山修司と成田千空

齋藤 美穂

青森の異才・寺山修司

昭和二十年代後半、寺山修司の青春は俳句をはじめとする文学活動とともにありました。父を戦病死で失くし、遠く九州に職を求めた母とも離れて暮らすことになった寺山は、中学校の文芸部誌を自ら編集して小説・短歌・詩・俳句・童話を発表、高校では特に俳句に熱中して仲間と競い合うように複数の結社誌に投句しました。進学を機に上京し、その後は前衛的な創作活動を中心に国内外で活躍しました。

私は五年前、寺山修司没後三十年の朗読会を準備する中で成田千空と寺山との関わりを初めて知りました。高校一年生の寺山は、親友・京武久美

と市内全ての結社に通い、「最終的には自由に考えが述べられる青森俳句会に所属することにした」といいます。同人誌『暖鳥』を舞台に、三十歳の気鋭の俳人・千空と才気あふれる少年・寺山はどのように交感し、また新しい発想と表現で創られた彼らの俳句について千空は何を思ったのでしょうか。

『暖鳥』誌上に見る二人の交流

一九五三年をむかえて

“私はかくありたい” 寺山修司

玫瑰やいまも沖には未来あり

愛誦句です。こんな句を作つてみたいと思つて始めました。／来年も再来年も、私は俳句を作らねばならぬようです。私の乏しい青春性を引き出してくれた「万緑」誌上で今年は叫べるだけ叫んでみたいと考えております。暖鳥誌では倅に千空さんが選者になられたとか。この一本のロープの上には今までも乗りたいと考えつづけていた雲があるような気がします。更に。山鬼のいわゆる実存哲学へ掘り下げるといふ句。それらに私は人生観の手術を受けるような戦りつを感じます。奇述的な言語の使い方の異様な魅力は私をはなしてくれそうにもありません。この線に沿つてドラマ性(俳句のフィクション)を試作してゆきたいとも考えております。

(『暖鳥』二十八年一月号)

寺山は中村草田男の影響を受けてドイツの知識人らの本を愛読し始めたといえます。寺山が手繰

ろうとした一本のロープは草田男と千空をつないでいました。『萬緑』の中で草田男の評価が高い千空が『暖鳥』の選者を引き受けたことは、寺山をますますやる気にさせたことでしょう。西東三鬼の新興俳句に魅せられ、「ドラマ性」のある俳句に没頭していた寺山少年を千空は次のように評しています。

明暗直言―二十八年暖鳥集総評 成田千空 寺山修司氏。

柔軟な若々しい感性が強み。しかし、ときをり先達のすさまじい模倣が気になる。唯、この人の場合その模倣の仕方に獨特の敏感さと手離しのイメージがあって捨てがたい。捨て難いがやはり気になる。これが創作や詩の場合だと、思ひきり広い世界にイメージを展開出来るが、俳句という短詩型ではどうしても細工が目立つのである。しかしこの人の稟質を思ふと、俳句に新しいイマジネーションの世界を拓く萌芽にならぬとも限らぬので、当否はしばらく保留したい気持である。

この作者のいちばん素直な感情の表白は母の句であらう。

丈を越す穂麦の中の母へ行かむ

氷柱風色噂が母に似て来しより

（『暖鳥』二十八年十二月号）

寺山の独特な空想力は後の創作活動を彷彿とさせ、千空の評言は図らずも現実のものとなりました。千空は（寺山の長所を俳句の骨法に叶うように生かせれば俳句というジャンルの可能性が広がるのでは）と考えていたと思います。イマジネーションの世界にも確かな感情の存在を求めて寺山の俳句の行方をみつめていたのです。「母を詠ん

だ俳句」はその意味で注目すべきものだったのでしょう。

千空の二つの視点

平成六年の雑誌の対談で千空は改めて寺山の才能について語っています。

十代の高校生が主張を掲げてですよ。／いろいろな流派の俳句がいっぱいある時代に、ロマネスクの俳句をやろうとしていたわけですから。これは新しい主張だと思うね。ロマネスクというのは、空想ということでしょうか。既成俳句はほとんどリアリズムですからね。／非常に特色のある才能を持っていたということだろうと思います。

〔千空対談 京武久美「『文芸あおもり』第14号」〕
俳句の可能性を追求する千空の態度は驚くほど柔軟で開放的です。千空は寺山の良き理解者であり、彼の資質に期待したことは明らかです。

一方、千空にとって俳句は「作者の生き方と作品との往還」なくして成立し得ないものであり、その点では少年時代の主張といえども寺山の俳句に諸手を挙げて賛成することはできなかったのではないのでしょうか。

私たちは在ったことではなく、見たことを俳句とし、つねにそれを私ら人生の「前」avantに置こうとたくらんだ訳である。つまり私小説は実生活のあとにあるが、私らの俳句は実生活の前にあるという訳で、私らが美しい日々を送るために俳句は美しかるべきであろうし、尚思索的でもあるべきだろう。（寺山修司「光への意志」『牧羊神』昭和二十九年十月）
俳句以前の実生活から出発する作家の姿勢――

【千空点描】

千空という俳号

「せんくうです」と、はっきりと名前に力をいれて挨拶された。電話でも同じように話す。なつかしい響きである。

俳句を初めてまもなくの二十代から使っている千空は、本名・力（ちから）をもじったというのはよく知られている。

本名の力は、子どもの頃から好きになれなかったという。

また、愛読したルリケの詩の一節に、

千の空からこぼれおちる翳の一滴一滴を
しずかに濾過しながら……

とあるのに出会って、うれしさをおぼえたとも書いている。

ひそかに短歌を投稿したり、評論を書くときは「乾千太郎」「千太郎」の名も使っているが、これは千空のもじりであろう。乾は西北の古い呼び名で、乾橋のある五所川原のことである。

〈佐〉

千空が重要視した俳句観に少年らの俳句を照らすと、その胸中に払拭し難い懸念が残りました。千空は寺山らの創作姿勢について次のような手記を残しています。

少年は虹のような嘘を吐く。左様、虹のような。無責任な、殆んど特権的な嘘。つまり誠の嘘。嘘がたちまち誠になる嘘。危ふさを知らぬ嘘。人間以前の嘘。こういう嘘に味をし

め出すと、表現がゆがんでくる。そのゆがみを、芸術的なデフォルマションと錯覚する。／デフォルマションは「経験」と「未来」のしごきから強く出てくるので、單なる「未来」から出てくるものではない。眞似事なら出来る。左様、彼らは可愛らしい眞似事やつてゐるに過ぎない。少年らしい利巧さをもつて。彼らは少年であらう。その意味では誠に少年らしい少年俳句をつくつてゐるので、その点、俳句界では新しい。／修久君等も、もうそろそろ小出しのズルさをよさないといふにダメになつてしまふぞ。もちつと青年になれ。 (千空資料「昭和二十九年自由日記帳」)

千空は「新しい俳句」に潜む可能性とともに、危うさをも指摘していました。「傳統の安易さの中に眠るものでもなく、新興の放埒さの中に溺れるものでもない」という師・草田男への信頼と自身の論理に支えられた俳句観は終始一貫しており、いついかなる場合も揺らぐことはありませんでした。

作家の責任は、本来、実感した現実にあるのではなく、作家の創つた世界の上にある。実生活の現実↓批判↓仮説↓ロマネスク。という過程に於て、創作行為が「生」の全的とい

東奥日報「没後10年 成田千空この1句」

(第12号から続く)

- 3／5 白鳥の啼かんとす頸ほそりけり 西谷ともえ
3／13 ししうどや金剛不壊の嶺のかず 横澤 放川
4／24 五月来る夜空の色のインク壺 大久保石漱
*掲載終了。

なみになるわけだろう。こうなれば、作家は自分の創作した世界の一本一草といえども責任を負わねばならぬ。それらの運命を予測しなければならぬ。／それが経験を軽んじたもつともらしい「嘘」であれば、もはや「人間以前、作家以前」の作品である。／これに対しては無責任な賞賛などやめるべきだ(成田千空「あだしやまのいしのさざめごと」『萬緑』昭和三十一年)

昭和二十八年、十七歳の寺山は全国学生俳句会を組織し、俳句研究社の後援を得て学生俳句大会を主催しました。ジャーナリズムによる寺山の取り上げられ方にも千空の視点は極めて冷静であったことが窺えます。

寺山の俳句絶縁と再開

寺山にとって「草田男は青春」でした。二十八年、寺山は「青春性を引き出してくれた万緑で今年は何だけ叫ぶ」と意気込み、同八月から翌年十二月までに三十句近くの作品が『萬緑』に掲載されました。

その年の十二月、第一回萬緑賞の受賞者は「青森県の成田千空」に決定しました。寺山にとっては、他県の誰が受賞するよりもショックであったかもしれません。親友の京武は、「寺山は大ショック。青森県にもこういう人がいるのかってね。それを超えないと駄目だということですからね。」と述べています。翌年一月九日の新年句会では千空の万緑賞受賞並びに暖鳥句集刊行を記念して開かれました。同席した寺山は何を感じたのでしょうか。

早稲田大学に進学し、『短歌研究』の第二回五十首詠の受賞を機に学生歌人として注目された寺山

は、「もはや僕の伸びた身長に合わなくなった」と三十一年に俳句絶縁宣言をします。俳句から短歌へと移った寺山はここでも作品の模倣や虚構について指摘されますが、「ばくの生活行為はばくの作者のそれとは同じではない。たゞ共通しているのは世界観でありロマネスクである。」(ロミの代辯―短詩型へのエチュード―『俳句研究』三十年二月号)と俳句時代と同様の主張を繰り返しています。

千空にとって俳句は「生きる」ことを確かめる手段でした。つまずいても突っぱって生きる過程を表現したものでした。自由なイメージと言葉の世界を構築し、制約のあることで成り立つ文学のジャンルに挑んだ寺山修司。その表現方法の可能性には千空も注目しましたが、現実を生きる実感から離れた俳句は千空にとって「俳句である必要がない俳句」であったと思います。

「君のアレンジの才能は俳句や短歌よりも演劇に向いているのではないか」

千空は寺山に手紙を書きました。返事は来ませんでした。その後寺山が演劇や映画などに活動範囲を広げていったことは周知の通りです。

寺山は俳句絶縁宣言後も句作をしていました。死の直前に新しい俳誌を創刊する計画があったと聞いて、千空は寺山と俳句について再び思いを巡らせています。

(あまりいい俳句はできなかったんじゃないかな。だがしかし……)

俳句を追求する眼鏡の奥の目は微笑んでいるように思えてなりません。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

前衛俳句の兜太と伝統の千空



金子兜太氏が2月20日、98歳で亡くなられた。
『萬緑』平成20年11月号に、兜太(左)と千空が、まるで少年のように頭を突きあわせて語る写真が載っている。前衛と伝統、東京と地方、日本銀行員と零細書店主、まるで対極の二人だが、よきライバルであり友人だった。反戦平和、定住漂泊など、共通点も少ない。

『俳句研究』草田男選で競う

出会いについて、兜太は次のように述べている。
成田千空との初めての出会いは、昭和十六年、改造社の月刊『俳句研究』誌上だった。当時新鋭として注目をあつめていた中村草田男の選句欄が新設され、その第一回の発表に、千空と私の三句一組が特選として掲載されたのである。私にとっては大変な喜びだったわけだが、並んでいる千空の作品に得も言われ

ぬ才能を感じ、それに気圧されて、喜びも半減してしまった。

(「千空を惜しむ」『俳句』平成20年2月号)

兜太と竜飛崎・十三瀉へ吟行

昭和37年、千空は来青中の兜太と竜飛崎へ吟行、40年にも兜太・堀草男と十三瀉へ吟行している。草男も前衛俳句の推進者である。

45年6月、戦後俳句作家シリーズ『成田千空集』が海程戦後俳句の会から刊行された。千空にとっての初めての個人句集だった。草男は『海程』同人会長、兜太も創立者(のちの会長)だったから、千空集は二人の推薦があつてことだろう。

現代俳句協会と俳人協会

昭和二、三十年代の「社会性」論議華やかななかで、千空がかなり冷淡だったことも、現代俳句協会から俳人協会が分離独立したときも極めて客観的に対応していたことも、そうした表現姿勢に基づいていたことが分る。

(兜太、前出「千空を惜しむ」)

現代俳句協会は昭和36年、賞の選考をめぐる団体内の対立が激化し、中村草田男を中心としたグループが有季定型を掲げて俳人協会を結成し、草田男が初代会長となった。

千空は37年に現代俳句協会会員となるが、やがて距離をおくようになる。

兜太は58年から現代俳句協会会長を勤め、その後、名誉会長となる。

千空は、香西輝雄の薦めによって昭和61年、俳人協会に入会している。その経緯を日記からみよう。

【作品鑑賞を読む】⑫

禿頭と白頭われら露明り

禿頭も白頭も長寿のしるし、天の嘉^{よみ}するかがやきがある。「われら」とよび、「露明り」と言ったところ、健やかで爽やかなひびきがある。この朗々闊達の透明感、作者の誠実真摯な生き方を実証するものであろう。怠惰で安逸な生き方に、この充実感はおとずれはずもない。

老いたれば大きく見ゆる春の月
古希よりの月日は祈り梅白し

この二句もまた見事な老いぶりを示す。

「大きく」と言い、「祈り」と言ったところに、謙虚で積極的な生への意思が見てとれる。大地に足をふんばって生きる人の、健やかで豊かな氣息を示す句だ。

この揺るぎない熟成の背後には、たとえば次のような慥かな風土が在る。

羽の国の平らをつくし雪降り
春暁のあめつち分れ羽後平野

この重厚でおおらかに風土が、成田千空というかけがえない作家を生んだのだ。

いつよりのわが尉の眉雪しきり

『白光』掉尾の一句。「雪しきり」が盤石だ。

大 串 章

(『俳句』平成9年6月号)

3月18日 香西輝雄から電話あり。俳人協会加入について。

3月20日 俳人協会から書類が送られてきたので早速、入会の手続きをとる。香西輝雄の推せんである。俳人としての締めくくりとして、決意する。草田男師もそれを希っているように思える。

63年、句集『人日』により俳人協会賞を受賞。平成10年、千空が蛇笏賞受賞のときの選考委員は兜太だったし、14年、兜太受賞のときの選考委員は千空だったから、認めあっていたのだろう。新聞俳壇は一般に開かれた門戸であるが、兜太は朝日俳壇の、千空は讀賣俳壇の選考で、ともに多くのファンを持っていた。

反戦平和賞、定住漂泊の思い

兜太はトラック島で戦争の悲惨を体験し、千空は青森空襲でこの世の地獄を見た。

水脈^{みづ}の果て炎天の墓碑を置きて去る 兜太
炎帝よのけぞりにこの焦げ死体 千空

兜太は東大卒なのに日銀では労働運動に関わり管理職につかず、荒凡夫を自任し「定住漂泊」を貫いた。宮仕えはしても自由人だったのである。千空は役所や会社に勤務することなく、大地を耕し、また小さな書店の主として生きてきた。二人の俳句表現は異なってもその根は戦争体験であり、漂泊の思いを強く抱いていたのである。

定住漂泊冬の陽熱き握り飯 兜太
火祭の夜にて大きな握り飯 千空

亡くなってから発表された絶筆

死に際に残す詩歌を辞世の句という。現役俳人を買いた兜太も千空も、病床でもペンを離さず、俳句をつくり続けた。二人に「辞世」という意識はなかったかも知れないが、亡くなられてから発表された絶筆がある。

2月に亡くなった兜太が最後に詠んだ9句が主宰していた俳誌『海程』4月号に発表されるといふ(朝日新聞などの報道による)。

千空の最後の8句は角川『俳句』平成20年1月号「新年詠」に発表された。この号には、兜太の「山陰」8句も掲載されている。

兜太は1月上旬に肺炎のため入院し、25日に退院したが、再び入院した2月6日まで、日中は熊谷市の自宅で、夜は安全のため高齢者施設で過ごした。常にペンと原稿用紙を身近におき、俳句を書けるようにしていたという。作品に3度も出て

兜太が詠んだ9句(『海程』4月号)

雪晴れに一切が沈黙す
雪晴れのおそこかしこの友黙まる
友窓口にあり春の女性の友ありき
犬も猫も雪に沈めりわれらもまた
さすらいに雪ふる二日入浴す
さすらいに入浴の日あり誰が決めた
さすらいに入浴ありと親しみぬ
河より掛け声さすらいの終るその日
陽の柔わら歩ききれない遠い家

くる「さすらい」は、兜太が口に使っていた「地に足がついた暮らしを大切にしつつ、心は自由にさまよう」「定住漂泊」のことである。

千空は平成19年11月に亡くなった。7月に青森県文芸協会総会で理事長としてあいさつをした。その中で「癌に侵されていて余命は長くない」と公表した。

9月末に入院したが、横浜市で開催された萬緑全国大会に出席し、吟行にも最後まで参加して代表としての責任を果たして帰宅後、再入院した。病床で萬緑の選のほか讀賣俳壇の選もし、意欲的に作句を続け、亡くなるまで俳句を作りつづけた。『俳句』1月号「新年詠」の8句が絶筆となった。

入浴の句が兜太に3句、千空に1句ある。そこに束の間のやすらぎを見いだしていたのかもしれない。(佐々木達司)

千空が詠んだ8句(角川『俳句』20年1月号)

清涼水鼻に突きぬけ命なり
子を連れて小鳥来てゐる声がする
月は無く夜勤介護士吾子のやう
秋白き癌の錠剤儚なしや
凄まじき月光となる個室かな
ベッドにも崖つ淵のあり秋夜寒
介護婦のみな湯女となる初湯かな
寒夕焼に焼き亡ぼさん癌の身は

金子兜太と成田千空

齋藤 美穂

雑誌『俳句研究』での出会い

平成三十年二月二十日、俳人・金子兜太が九十八歳で亡くなりました。現代俳句の革新や大衆化、国際交流に尽力し、最晩年まで第一線で活動した俳人でした。

一昨年の夏、東奥日報社主催の第七十回県下俳句大会に黒田杏子さんとともに招かれ、記念対談では自身の戦争体験や世界遺産たる俳句の魅力について語りました。気骨のある言動で衆目を集めた兜太は本県ともゆかりの深い俳人です。

「夏季雑詠」地位

青田波青田の沖を千空師 弘前 桜庭 恵

【評】私は千空が好き。「青田波青田の沖」に千空は必然ではないが、千空を尊敬している人間が千空で遊びの句を作れるのは青森だからこそ。
(東奥日報 平成29年8月27日付)

千空と青森に対する親しみがそのまま表れた選評に感激したのは私ばかりではないでしょう。

浴衣着を兜太に褒められ身を縮め 市子

(平成29年9月)

九十二歳になる千空の妻・市子さんはおふたりの来県に特別な感慨を抱いていました。大会後の

九月に訪ねると、「昔千空が同宿したときに、兜太さんから浴衣姿を褒められたという話を思い出しました」と、詠んだばかりの俳句を見せてくれました。「兜太さん、地方で暮らす千空と会って意外だったのね」と笑う市子さんの言葉が耳に残りました。

千空が八十六歳の生涯を閉じてから今年で十一年になります。当時の兜太の追悼文に、千空との出会いについて見ることができません。

私が千空の俳句を初めて読んだのは、昭和十年代で、二人とも二十歳前後だった。当時、改造社が月刊で出しはじめていた『俳句研究』が、主宰誌中心の俳壇に初めて出現した流派にとられない総合俳誌として広い読者を得ていて、新人だった中村草田男の選句欄が設けられたことも新鮮だった。その第一回特選欄に千空の三句が載っていたのである。しかも、これも当時盛り上がりを見せていた新興俳句運動の好句と較べて一步も退けをとらない知的で斬新な句柄だった。同世代に、東北の地に、こんな青年がいると驚き、以来私は千空の俳句を注目しつづけていたのである。
(読売新聞 平成19年11月30日付)

兜太と千空はともに同じ年頃で俳句を始め、俳人として生涯を全うしました。千空は兜太について、「初学の段階で、俳句の季題趣味を否定していた草田男から熱心に学んだ俳人である」と認識していました。俳人・金子兜太を論ずるときに草田男との共通点を重視する捉え方は千空独特ではないかと思えます。兜太と千空の関係を解くうち

に、俳人として異なる立場にいるように見えたふたりが、まるで異母兄弟のように感じられることがありました。主張に隔たりがあってもどこかで惹かれ合い、認め合うことができる同志であったというべきでしょうか。

人間・兜太から学ぶ

私は草田男から、自由な発想と厳格な表現を学んだ。自由にして厳格な俳句の可能性を、どうやら私は求めてきたようである。その在り方は作者によって多様であり、師以外に多くの作者から学ぶところがあった。中でも草田男に対する金子兜太の立ち向かい方に、打たれるものがあつた。『俳句は遊びの文学』

俳人・兜太への関心は、次第に人間・金子兜太への敬慕に変わっていききました。昭和四十五年の日記からは兜太に魅入られた千空のようすが伝わってきます。

四月十七日

「海程」六十一号、交通事故で死んだ大山天津也と金子兜太の交渉について書いた兜太の一文「梨の木」(50枚)は近頃出色の文章である。どうしても書き残して置きたかった文章だそうである。さもあらん。俳句・俳人・俳誌・主宰・編集・家族・人と人・師弟・同志・生活・生存・詩・生・死、その他空漠たる問題をとらえ生きていた大山と死んだ大山を浮彫りにしている。すこしでも気がたるむと、兜太はこわい人間になる。すでに師たる資格を備えている。大山は金子から逃げたかったのかもしれない。「海程」の編集を5年

間やって、不意に姿をくらましたという。その姿を追求し、何とか胸に収めたいという人間的熱意がこもった文章である。あだおろそかには読めない。

六月二十五日

海程の『昭和世代合同句集』を贈られて、読む。どこから来て、どこへ行くのか、わからない句が大多数であるが、若い才能をこれだけ引きつけて、夢中にさせる前衛世界に注目せざるを得ない。／金子兜太の序文はいつものことながら立派。この人は尊敬に値する人だと、文章を読むたびに思う。現代俳句の新人連中はことごとく金子に引きつけられていると思う。

千空は兜太から送られてくる句集や結社誌をはじめ俳句雑誌の座談会などを読み返しました。当時、「自分の作品は読みたいくない」という心境から抜け出せずにいた千空にとって、兜太の持つ求心力や人間性がにじみ出た文章は慕わしいものでした。この年に刊行された戦後俳句作家シリーズ『成田千空句集』（海程戦後俳句の会）について、「一〇〇部届くが誰にも何もものを云いたくない。若し欲しい人があれば呉れてやって、手許に一冊も残して置きたくない気持ちである」と記していた千空のもとに、誰よりも早い声が届きました。

七月十七日

金子兜太よりハガキが飛んでくる。オメデトウという。すこし元気が出る。兜太は即時即決の筆マメさをもっている。筆マメだということは精神が健康だということである。大いに見習うべし。

日常の雑多な用事に身動きが取れず受贈誌への礼状も遅れがちな千空でしたが、一通のハガキは千空を奮い立たせました。草田男の精神を目標としながらも、千空には千空の目指す俳句というものがありました。俳句の何たるかをしっかりと押さえながら個性的である俳人こそ千空の目標であったのです。

蛇笏賞をめぐる

平成十年、千空は句集『白光』により蛇笏賞を受賞しました。この時の選考委員は金子兜太、飯田龍太、藤田湘子、森澄雄です。兜太は選評の中で「重厚、洒落な生活者の、自分に忠実な作品の集積である。若い頃から注目してきた作者なので、この人の受賞に異存はない」と述べています。

千空は受賞式で、「草田男先生と一番似ているのは金子兜太さんで、それは未完成で、未完故のエネルギーを持っている。私にはその種のエネルギーがない。／ただ熟成してしまつては駄目なのでもう一回立ち上がっていかねばならない」と挨拶をしました。兜太は後に、「受賞の挨拶も人を食ったものだった。自分のことは殆んど言わず、そのとき選考委員の一人だった私をつかまえて、草田男といっしょにやるべきだった、二人とも一生未完で終わるところが共通していると澄ましていたのである。千空にとっては、私などは乳くさい男だったのだ」と一流の言い回しで回想しています。

十四年、兜太は句集『東国抄』で同賞を受賞。この時は成田千空、飯田龍太、藤田湘子、宇多喜代子が選考委員でした。千空の兜太観が終始一貫

していることは、兜太の受賞後に発表したエッセイからも知ることができます。

俳句の類想を寄せつけない、中村草田男や金子兜太氏等は未完成のエネルギーがあつて、熟成しきれないが、端倪すべからざるものがある。そしてときおりキラリと光る。「おおかみに螢が一つ付いていた 兜太」。彼は八十三歳で、元気のよい俳人だが、百歳ぐらいまで生きて、探求を続けられ、新たな俳句の地平がひらけるように思われる。

（読売新聞 平成14年12月11日付）

若い頃から意識し続けた俳人への信頼は厚く、俳人・金子兜太の姿勢そのものに千空は作家としてのあるべき姿を見ていたと感じます。九十八歳まで現役を貫いた兜太に泉下の千空は脱帽しているに違いありません。

津軽の人との生活をもとにした静かな句作りの姿勢を一貫して崩さなかった。戦後の前衛俳句の波にも見向きもしなかった。そういう地味な俳人への受賞を喜ぶたい。

（毎日新聞「詩歌の森へ」平成10年7月15日付）

千空の蛇笏賞受賞で、選考委員を代表して述べた兜太の祝辞には、自らの半生を重ねるかのような感慨が込められています。非情な戦争体験が及ぼした影響、その後の社会生活、生命へのまなざし、接近しているように見えて一致しない点を含めて、現代俳句で大きな役割を果たしたふたりの関係に興味は尽きません。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

成田千空資料再録 ⑬

『暖鳥』第123号 1957年8月15日

戦後作家展望(二)

金子兜太

成田 千空

仰むきしとき月ありぬ一つの月

昭和二十二年、すでに敗戦となったトラック島での作である。さきにラバウルから生還した香西照雄の「揺るゝ大空」に対して、ここではあくまでも感情を抑えつゝ、一つの明確な物に即くことに依つて極限状況に堪えている姿勢がある。「仰むきしとき月ありぬ」という事実の今更めいた驚きから「一つの月」という存在の認識に至る過程に状況の一切がこめられているかたち。戦場という殺戮の現場が今は一つの月に収斂されて作者と共に在る。「駆逐艦の甲板に仰向けに寝て、遠のいてゆく島々と空をみながら、あゝ何てことをしたと思つた」(「風」一〇〇号)。そして、「あゝ何てことをしたと思わぬように努める」ことが作者の命題になる。一つの月。この単純で至難な命題に作者の戦後がかけられることになった。余寧金之助は同じ東大作家グループの金子兜太を香西照雄と比較して、「香西は魂(ゼレ)的だし、金子は精神(ガイスト)的だ。前者は資質であり本性だが、後者は教養であり意識だ。だから香西は存在そのまゝを息吹として投げ出すだけではや魅力にみち、金

子は又対象を崩して自己の方寸に組立てる眼光の掃射に力を潜ませる」(「万緑」一四号)と論じている。謂わば情性と知性に区別した見方で一応肯定出来るし、その後の歩みを考えると十年前に指摘したこの比較はなかなか鋭いのである。しかしむろん分ちがたい矛盾をはらんでおり、香西は意識の領分に己れを駆りたて、金子は知性の肉体化に腐心する。しかも金子は意識が多様なだけにカオスの渦中に揉まれ、反逆に依つて己れを支える。作品の振幅が大きいのはそのためである。

魚雷の丸胴蜥蜴這ひまはりて去りぬ

古手拭蟹のほとりに置きて糞まる

掌の貝に日当り遠くゆくスコール

戦場でこれだけ人間の眼が生きていたこと。生きた人間の眼が戦場では非妥協的だということ。現実とは環境そのものではなく環境と人間の関係なので、常に生きた人間の眼だけが現実をとらえるということ。ここでは作者の青春の反逆が、そのまゝ、現実感を打ち出していることなどを考えると、むしろこの作者の只ならぬ資質がわかるのである。一本の古手拭はお守りより大事なわけであつた。この資質はすでに戦前から現れている。

ノートに触れ冬の犬の尾固かりき

農夫の胸曇天の肉をつみ重ね

この「農夫の胸」の句など創作の時期が何か疑わしいほど心意の重厚さが示されている。天候や供出に一喜一憂する農夫の生きさまを長い歳月にこめて、ひどく現実的に定着している。「曇天の肉」という大胆なイメージのダイナミックな表出は、方法の面から見てもすでに既成俳句を突き抜

けている。

朝日煙る手中の蚕妻に示す

昭和二十三年作。金子兜太の家郷は秩父山峡皆野町。医家に育ち、俳句は父伊昔紅(馬酔木同人)の影響ではじめたようだ。「朝日煙る」はいかにも身近かな山峡の町の朝日だ。ここにはくより立つ情感に包まれた一つの意志が示されている。手中の蚕は純白に、未知の期待をはらんでいるようで、新妻に示す作者の胸のうちが無言裡にうなずける。この蚕は又作者の風土の象徴であつて、初期の作品に、

山なみのひと隅あかし蚕(こ)のねむり

というナイーヴな抒情が見られる。しかしここには秋桜子と茂吉の発想の痕跡があり、学ぶところがあつたに違いない。そして、「蚕のねむり」から「手中の蚕を妻に示す」に至る作者の健やかな成長を見のがせないのである。その成長は――、当時(昭和十年代)「成層圏」という高校生大学生の俳句グループがあつた。皆同時並行的で始終ぶつかり合つた。東京では友達扱いを甘んじながら草田男が加わつていた。草田男は長子から火の鳥へ大きな転換に全力に向つており、その勁い影響が皆に事実上の方向を与えていた。とにかく四六時を欠かぬ猛烈な出会いと議論、と常識を逸れた耽溺と反撥と、あの愛すべき馬鹿さ加減はどうしても、僕らの青春時代のものだつた」(「万緑」一四号、余寧金之助「三人の作家」という。恵まれた仲間の出合い、批判に次ぐ批判、その中に個性が準備されていた。兜太の個性。左様、兜太の場合、本性とか意識とか言わないで個性と言えбайい。

例えば、「男根隆々と新年を迎えました」という年賀状は彼の本性であつて、彼の場合本性はそれ以上説明無用のものである。それだけに本性の重さが意識の抵抗になる。ここにカオスが渦巻くので意識だけでは頼りにならず、個性の全力的な認識作用がはじまる。カオスの渦からダイナミックな作品が形成される。そして作品は始めから人の批判を待ち受けている。その貌つきが時折ハツタリにも見えるのだが、本当は彼の作品ほど仲間を必要とする作品はないのである。「手中の蚕妻に示す」。ここにすでに仲間意識が働いているわけで、次第に社会性へ展ける必然性をはらんでいるのだ。

手の傷も暮しの仲間雪青し

彼の社会性は本当は彼自身の救助から出発しているともいえようか。もともと口ほどの勇しさはないのである。死んだ富永太郎は「僕には群衆が絶対に必要であつた」とぎりぎりの声を上げた。兜太はもつと身近かに「若し寒雷や風の仲間がいなかったら僕はとくに墮落するか、オポチュニストになり下つていたかも知れない。どうも安心出来ない」(「風」一〇〇号)と本音を吐いている。しかしそれは彼の根に巣くつている情勢に関わりがあり彼はそれを知っている。結局、彼は孤独に堪えきれず常に行動を欲する作家である。別な言い方をすれば本性より可能性を欲する作家である。従つて未定と脱線が宿命のように彼につきまとう。

芽立つじやがたら積みあげ肉体というもの

昭和二五年作。「あゝ何てことをしたと思わぬように努める」彼の命題は、先づ自分の思弁をあくまで地上の(自分の)ものとして確めることから

始つたようだ。まやかしを許さぬ思弁。具象を結ばない思弁は無縁のものとしてしりぞけられ、意識の肉体化に腐心した。この事は戦後早々からずうと続いて来た大事な問題で、彼は中野重治の「茂吉のノート」から「レオナルドが生理の妙に対する徹底的な追求は、彼が地上の人間の情緒的結合のなかへ両者の統一を、構図そのものとしてもたらした」(「風」九号)という覚えを書きとつている。時流に崩壊する思弁の脆さ。このことは戦争の悲惨を体験した知識人の痛みでもあつて、だから、昭和二年坂口安吾が「教祖の文学」をひつさげて小林秀雄に当り散らしたとき、現実に対する知性の抵抗が竟には無常観の方へ外れる小林的孤独より、否定精神が肉体によつて行動され、そこから人間の積極的な生き方を獲得しようとする態度に彼は手を差しのべたわけであつた。思弁が行為の裏付けによつて肉体化され具象化される。その過程——芽立つじやがたら積みあげ肉体というもの——は彼の創作の態度でもあつた。「日本の社会の特殊な形態。それが吾々のカオスの重大なモメントだつた。その中に置かれている自分の自覚的位置付けが先ず自分によつて認識されなければならぬだろう。それは自分の肉体を通してその肉体を知ることでもある。しかしそれは原初的な形でなしに、現在の自分を意志的に出発点とする意味から問題になる」(「風」一五号)。つまり自分をめぐる混沌こそ作品のモメントなので、作品自体が認識の路標となる。

落縄暗き月の出時を月の方へ

五月の草に囲まれあくまで野の肥壺

確かな岸壁落葉のときは落葉の中

1954年 新自由日記(目付のない思索手記)

兜太俳句についての感想

兜太の俳句は、論理と非論理が同居しているので、表現がギクシャクしているが、それだけに読者を釘付けにして離さない。兜太の魅力と難点がそこにある。あれで更に読者に開放感を与え得たらしめたものだが。開放しそうで開放しない。難しいところだ。しかし釘付けされても別にイヤな感じはしない。読んで、飴玉のように簡単に融けないので、アキが来ない点がいい。彼もこれからだ。しかし、あるいは完成しないで終るかもしれない。彼の魅力はいわば未完の魅力なので、この精神風土は古典を喪失した現代の悲劇と分ちがたく結びついている。これは誠に率直素直な時代の反映とみてよく、その意味では典型的な現代の俳句と言えるだろう。しかし、反面凡百の非現代的現代俳句の中で、こういうキ型枯屈な表現に渴を醫やさざるを得ぬ事情は殆んど、後家のガンバリに似ている。

俳句を純粹ポエジーとして生かす別な方法がないものか。

* 題は仮に編者が付けた。

林檎なげとどかす暗い事務の渠

銀行員に早春の馬唾充つ齒

「現実的なものはその発展の中に自らが必然的なものであることを証明する」(ヘーゲル)

メーデーへ石垣ざらざら車窓亘る

昭和二五年作。日本銀行員として労働運動の渦中中にありながら、彼の態度は外部から知るべくもない。その点、中野重治が堂々と議会演説集を刊行したような徹底さはなく、まして臆面もなく規範的な演説を打つ神経は持っていない筈で、ここにもやはり彼の混沌が渦巻いていたと思える。しかし、「二つだけ自ら認めることがある。それは非人間的なものを見分ける眼と、それと絶対に妥協すまいとする努力に自信がある」「風」一〇〇号)ので、例えば、軍隊時代、棒倒し競技のとき、棒の根元をぐつとつかまえ、もみくちやにされる場所、じつとがまんしていたという、守るべきものに対する彼の一途な態度を考えると、彼の労働運動の姿が浮び上る。——その翌年、彼は東京から福島へ廻された。「イデオロギーの前に人間学(アントロポロジー)を持つこと」によつて進歩的思想のオポチュニストからまぬがれると信じている彼。しかも又「一本の毛の足らないヒューマニティは欺かれない」と臍を固める彼を考えると、「石垣ざらざら」はなかなか複雑な形容なのである。何より規範的なメーデーの色合によつて染められた作品でない。混沌とした日本の社会の特殊性が彼の意識にからまつている。敵はどこにでもいる。自分の内部にもいる。石垣が車窓を走り車内は戻った。そのざらつく戻りが彼の内部に波及する。幾時代にも亘り、なお残存する石垣の古びた肌目が身近かに彼の意識と触れ合う。メーデーへ。彼をメーデーへと駆り立てる意志の必然さと共に、現実への抵抗感が極めて肉感的に定着されている。同傾向の作品としては

車窓擦過の坂の一つに焚火怒る

があり、やはり抵抗感を心象によつて打ち出している。しかしこの場合、「坂」はアレゴリーだし、「焚火怒る」は一方的な心意の昂りを示しているだけで、内実が稀薄なのである。いつたいに彼は表現が整うことに反撥する。それはいゝが、対象から、からめ取った対象を心意の赴くまゝにでつち上げる。そういう表現方法を身上とするだけにアレゴリーと一方的な心意の昂りが目ざわりになる場合が多いのである。

爛れ熟した岩に向つて盛夏の餉

崩れた積木基地に似る夜の蜘蛛渡る
銀行員等朝より蛍光す烏賊のごとく

一つの充実した状況から発想されているだけに、これらのブロックンな表現の未完が惜しまれる。俳句という表現のリゴリズムが骨身に沁みている証拠である。

しよう然たる路上の馬を雛の間より

夜の餅海暗暗たと窓を攻め

秋曇山なす錆び罐の顔鉄線の手ら

手が長くだるし赤茶けた製鋼煙

ここまで来れば明らかに既成俳句と異質の世界であるだけに彼に多作を要求したいのだ。新しい技法は多作の裡に掴まれよう。図式的な方法論は彼の実作にどれ程のプラスをもたらしているかわたがわしい。何故なら、彼はすでに、思惟の具象化を行為に求めており、その行為こそが作品創造に結びつくことを認知している筈だから。惜しいことに彼は議論に比して誠に寡作な作家なのだ。

成田千空資料

佐渡旅行記

成田千空

新町簡易保険組合の旅行は私にとって三つの楽しみがある。一つは俳句をつくる楽しみ、一つは土地の風景や生活や歴史に触れる楽しみ、一つは町内の人々と親睦を深める楽しみである。これだけの楽しみにわずかな負担で済む恩恵があつて、まことに具合がよろしい。私はこれまで八度旅行に参加したが、それぞれ印象がふかく、楽しかった。その中でも昭和五〇年の佐渡旅行、五十二年の北海道旅行、五十四年の金華山旅行などが行程も長く旅行らしい旅行であつたと思う。佐渡旅行の思い出を辿ってみよう。

五〇年六月八日 晴

夜七時 新町簡易保険組合一行、津鉄観光のバスで佐渡へ出発する。高橋、平山、小田切、工藤、平田さんたちと座席が隣り合う。バスは夜の奥州街道を突っ走る。

六月九日 晴

新潟の新発田のあたりで夜が明ける。一望の越後平野である。阿賀野川を渡る。

大河より夜明けととのふ田のみどり
子鴉に水もみどりの越のくに

もう工場の大煙突から白い煙がたちのぼっている。火を吐いている煙突も見える。やがて信濃野川の河口に到着。河口の空に赤い大きな朝日が顔をを出す。

六時すぎ、新潟港からフェリーで佐渡へ向う。日本海は風。フェリーの舳の飛沫に虹が立って美しい。

虹を生む飛沫流人の舟ならず

日本海はひろく、佐渡はなかなか見えてこない。一羽の海鳥も一隻の漁船も見えない。昔の流人の心細さを思う。やがてうっすらと島が見えはじめる。大きな島である。

八時すぎ両津港につく。すぐ日蓮の遺跡根本寺へ。風雪の傷みが感じられる古い堂宇が三つ四つ。日蓮が籠った三味堂と太鼓楼、それに山門がおもしろい。太鼓楼の太鼓は破れたままといい。長い年月打ち鳴した太鼓であろう。

松の芯破れ太鼓も法の座に

妙宣寺から真野御陵、日野資朝の遺跡へ廻る。すべて高貴の流人である。竹林が見える。

青竹の青側々と佐渡の奥

竹叢の戦ぐ影儚び塚一つ
御陵は日がな下闇深きかな

新しい資料館で順徳院、日野資朝、日蓮などの資料を見学する。古文書の薄い墨跡にかなしみを覚える。

うす墨の怨みの古文日の盛り

七浦海岸、尖閣湾と見て、相川へ。

畦やさし七浦荒磯めぐり来て

更に藩政○の金山(宗太夫坑)を見る。昔の坑夫たちの生きざまが坑内のあちらこちらの穴の奥に人形の姿で配置されている。これが又動く仕掛けの人形なので、何とも生々しい。特に無宿人を集めてこき使ったという、水汲人夫どもの苦役がしのばれる。最高の金が、最下級の人夫たちの犠牲で掘り出されたわけである。

汗かけり金坑水汲みの命運に

ふり向けば金坑路ただ冷やかに
滴りや手掘り金坑迷路なす

大佐渡スカイラインという山脈の開発道路はさすがに見晴しがよい。黄すげの花が灯のように咲いている。道路は危険な箇所もあって時にははらする。バスはここを走り抜けて両津の町に戻る。宿は簡易保険保養センター。食事をしてから四五人の佐渡の踊り子の踊りを眺める。佐渡おけさと相川音頭。総会を済ませたあと、田圃で働いていた佐渡の女の菅笠の中の汗の顔を思い出す。

島に躍るひとつまも娘の物腰に

舞台が観光客に開放されて、岩谷の爺さまが得意のノドを聞かせる。よその土地の団体客も驚くほど元気な声である。

六月十日 晴のち曇

ぐっすり眠って、四時すぎに目がさめる。同室は、平田さん、工藤さん、対馬の爺さんと私の四人。八時すぎ、両津からフェリーで再び新潟へ。昨日に続いて今日も好天に恵まれ、海はあくまで

も静かである。新潟から再びバスで阿賀野川流域に沿って会津若松へ向う。阿賀野川ラインの景観が又すばらしい。

緑深い山のふところ深く、悠々と大河が流れ、その岸の所々に小さな村落があり、ここに人々の故郷がある。会津の町に入る。町は今も城下町の面影がある。この辺は村も町も瓦屋根の家ばかり。鶴ヶ城を二十分見物。あわただしい。いかにも実戦向きの堅固な城郭である。戦後復元された城だ。

一城の夢草いきれ土いきれ

お土産屋で会津塗の小筐を一つ買う。

塗研ぐや会津は青き山連ね

この辺から天候が変り雨がこぼれる。いよいよ飯盛山。徒歩で登るつり橋とその側にエスカレーターまで備えている。すっかり観光地と化しているが白虎隊の墓は昔のままである。墓に刻まれた十六才、十七才という文字が名前以上にかなしい。人間の歴史はすべてかなしみの種である。俄か雨が降り、遠く雷鳴がきこえる。雨にけぶる香煙の中にならぶ墓を拝む。砲音のような雷鳴である。

遠雷一つ飯盛山に聞きとどむ

白虎隊の記念館の写真を覗くと、おどろくほどの美少年ばかりである。だがこれも時間のゆとりがなく、早々と引き揚げる。

裏磐梯のコースをゆく。雲の切れ間に見る山の景観もわるくない。猪苗代湖を遠望し海拔千メートルほどの高みから松原湖へ下り、更に吾妻山のコースを登る。福島県の誇る観光ルートである。吾妻山は沢の眺めがすばらしい。深い深い萬緑の

沢である。この沢に最上川の源流の響きを聞く。福島、山形県境から米沢へ向う。バスは山峡の宿を一度見失って、どんどん通過し、一里以上も過ぎてから引き返し、夕方六時すぎ米沢簡保センターに着く。ここはただ吾妻山の山中で、海拔八百メートルほどの山峡の地。温泉がよい。白布温泉郷である。

六月十一日 曇、時々雨

朝四時に目がさめる。〇〇かげへ周りをすこし歩いてみる。白布山峡はしんしんとして夜明けの緑が深い。山鴉が鳴いている。溪谷の急流のひびきに耳を澄ます。ししうどの白花がいたるところに咲いている。山の気流が肌にすがすがしい。鶯も鳴きはじめる。山の鶯にこえて、宿の鶯も鳴きはじめる。

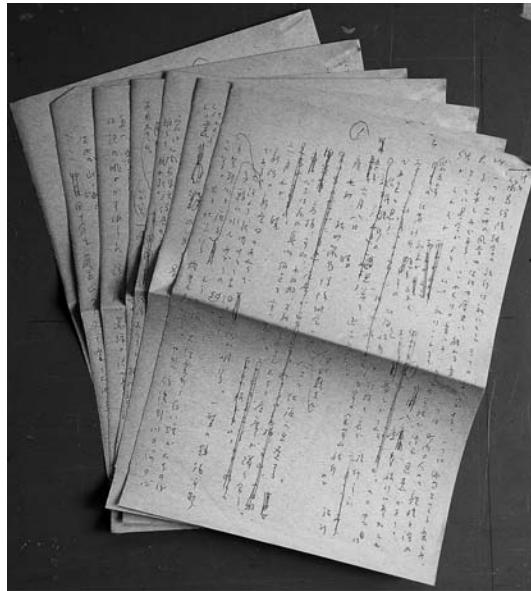
八時出発。吾妻山を下って米沢へ。市中にはまだ茅屋根の家が目立つ。なるほど勤儉の名君上杉侯の城下らしい風情である。ホップ畑、桃畑、サクランボ畑が盆地に多い。ここからは歌人斎藤茂吉の生地、上ノ山へ向う。だがバスは又しても、昼食場の山交ランドを見過ぎて四十分も蔵王山コースを登った地点から引き返す。その時間のロンドの高台から茂吉生誕地を遠望する。

古樹新樹茂吉のくを見下しに

午後一時蔵王へ再出発。やはり豪快な山容である。頂上付近は雲がたちこめて、視界ゼロ。冷たい風が吹きすさぶ。下りみちは雲が晴れる。青森とど松の群生と雪溪が印象的である。蔵王山は別名不忘山ともいう。

雪溪や昔を今に不忘山

はるばると蔵王ラインを走って、仙台へ出る。仙台から国道四号線を走って平泉で夕食。平泉からのバスの中は町内の人々の歌でひとしきり賑わう。盛岡から大館を経て十一時すぎ無事五所川原に到着。みんな重いお土産を提げて別れの挨拶。バスの運転手さん、車掌さんにお禮をいう。こういう旅行はいつまでも続いて欲しい。



*下書きは日記帳に挟まれていた。発表の有無は未確認。
B5判のザラ紙七枚にペン書き、赤で54・9・24とある。
斎藤美穂が解説、清書した。

佐渡へ 20句

『暖鳥』337号（1975年11月）

米うまき国を旅ゆくさくら鳥
大河より夜明けととのふ田の緑
子鴉に水も緑の越のくに

×

夏日の座水尾騒然と佐渡へ発つ
大佐渡は欣求浄土の夏日かな
夏日負ふ佐渡の赤牛五六頭

日蓮旧蹟

松のしん破れ太鼓も法の座に

順徳寺旧蹟

炎帝の真野やこの先人影なし

宗太夫坑

金坑の幽さ冷たさ生膚に

滴りしとど手掘り金坑迷路なす

ふり向けば金坑路夏醒さし

汗引けり金坑水汲みの命運に

金坑の業苦も夢のいま青嶺

のろま人形めくもの峡の種案山子

黄すげ淡き佐渡に一夜を経しえにし

青竹の青惻々と佐渡の奥

会津

松ふぐり緊め東北の根城たり

塗研ぐや会津は青き山連ね

蔵王

爺婆に蔵王の山田青みける

榎松の秀はいけにへの青山河

寄 贈 感 謝

藤埜まさ志さん（千葉県流山市）

戦後俳句作家シリーズ14『成田千空集』

『現代俳句全集』第4巻「成田千空」コピー

鳴海顔回さん（黒石市） 陸奥新報コピー

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』3・4・5月号

相馬明文さん（弘前市） 寄付金

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）

2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第15号は7月末、到着順に掲載します。

送り先（下段発行所、青森文芸出版あて）

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年10000円です。

2018年会費を領収しました（敬称略）

会津明郎、阿保子星、荒閑映子、荒谷信子、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、一戸鈴、葛西幸子、糟谷雅枝、鎌田義正、川東郁代、兼平一子、上條勝芳、木津谷絹子、木村玲子、櫛引麗子、小泉光子、後藤隆、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、佐藤繁、佐藤陽子、世良啓、寺門資子、瀬川君雄、高井まさ江、高橋睦子、高森ましら、館田勝弘、土田紫翠、外崎文夫、中嶋義雄、中村雅之、永山憲子、奈良知治、成田市子、成田圭子、鳴海顔回、仁科源一、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、浜田十三、藤田健次、藤埜まさ志、三上弘之、未津きみ、矢須恵由、山内ひろ子、山本こう女、吉田州花

2019年会費を領収しました（敬称略）

葛西幸子、藤埜まさ志

会員名簿（62名）

〈青森市〉

浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花

〈弘前市〉

阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、佐藤繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之

〈黒石市〉

鳴海顔回

〈藤崎町〉

清水雪江、世良啓

〈八戸市〉

上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉

米田省三

〈五所川原市〉

会津明郎、荒閑映子、一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉

木村玲子

〈中泊町〉

外崎文夫

〈つがる市〉

兼平一子、中村雅之

〈深浦町〉

草野力丸、山本こう女

〈岩手県盛岡市〉

瀬川君雄

〈茨城県那珂市〉

永山憲子、寺門資子、矢須恵由

〈茨城県水戸市〉

糟谷雅枝、小泉光子

〈茨城県日立市〉

高井まさ江

〈千葉県流山市〉

藤埜まさ志

〈大阪市〉

川東郁代

☆北極星☆

○金子兜太氏が98歳で2月に亡くなられたので、「兜太と千空」を小特集を試みた。前衛と伝統、2人は全く異なるようだが意外に共通点が多い。

○二人は初学から草田男先生に選ばれたライバルだった。それぞれ異なる道を歩んだが、互いに認め合っていた。千空さんが蛇笏賞を受賞時の選考委員が兜太氏、兜太氏が受賞した時の選考委員が千空さんだった。

○「漂泊の思いやま」ぬのは、芭蕉だけではない。兜太氏は日銀で管理職につかず「定住漂泊」を貫き、千空さんは農民として書店主として町の人々と生きた。その根源に壮絶な戦争体験があった。

○「千空先生に俳句を習う」連載が始まった。教えるというより生徒と共に学ぶ千空さんの姿勢も、世良啓さんの生徒ぶりも興味深い。

○『合本成田千空句集』の索引が悩みの種である。「五月」は「ごがつ」か「さつき」か。「墓」は「がま」か「ひき」か。門外漢には難問である。どうしてもそう読ませたい箇所には千空さんはルビをふるが、あとは読む側に任せているようでもある。それでは五十音配列ができない。

2018年5月20日発行

会報『千空研究』第14号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355323
FAX 0173-358414